

聖書:ダニエル書3章1～18節

説教:たとえそうでなくても

はじめに

時代は紀元前605年のことでした。南王国ユダがペルシャ軍に攻められ、当時まだ少年であったダニエルと彼の三人の友人たちはペルシャに連行され、やがてネブカドネツアル王に仕えることとなります。その王があるとき一つの夢を見るのですが、どんな学者たちもその夢を解き明かすことができなかつたことから大変なことになるてしまいます。王は怒りにまかせて全員死刑だと宣言し、何も関係なかつたダニエルも同じ宣告を受けてしまったのです。早速ダニエルは神に祈りました。すると神は幻のうちに現れ、争いが満ちていく地上に神がやがて一つの国を起すのだと語ります。このようにしてダニエルは王の夢を解き明かすことに成功し、彼は大臣の位に就き、三人の仲間たちもバビロン州の行政長官に就いていった。それが前回までのあらすじです。

今日の所ではまた大きな騒ぎが起き、ダニエルの三人の仲間たちが殺されそうになってしまいます。そこにどのような神のみこころがあつたのかを見てまいります。

1 ネブカドネツアル王

1) 金の像を建てる

今回の問題の発端は、ネブカドネツアル王が巨大な金の像を造つたことから始まります。高さはおおよそ20メートルで、ちょうど時計台の屋根の高さと同じくらい。それを金で作つた。14節で王が、「おまへたちは私の神々に仕えず、また私が建てた金の像を拝みもしないというが、本当か」と語っています。王が信じていた神の像であつたようです。

王がこのような金の像を造つたのはおそらく彼の見た夢が関係しています。王が見た夢のなかに純金の頭をした巨大な像が出てきたとき、ダニエルは、それは神から権威と力を与えられたネブカドネツアル王のことであると解説しました。ダニエルは全地を造られた聖書の神を指して言ったのに、王はそれを自分が信じる神にすり替えてしまいます。金の像を拝ませることによって、神の代理人である王の権威はますます強まっていく。おそらくこんなことだったのでしょう。

2) 告げ口

ダニエルと三人の仲間たちが王の側近として仕えることになったとき、異教の神々を拝む王と、いつか信仰のことで衝突するだろうということは覚悟していたはずですが、とうとうその日がやってきました。カルデア人がまさに信仰のことで彼らを告発したのです。カルデア人とはバビロン帝国の純粋な国民のことです。彼らにとって、ユダヤ人であるダニエルとその三人の仲間が、非常に高い位に就いて自分たちの国を動かしているのがおもしろくありません。それで、三人が金の像を拝まないという証拠をつかみ、このことを王に告げ口をいたします。

3) どの神が救い出せるのか

報告を受けた王は、早速、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人を呼び調査を始めます。ちなみにこの三人の名前は本名ではなく、バビロンに連れて来られてから無理矢理につけられ名前です。そんな屈辱的な扱いを受けながらも彼らは、モーセの十戒にある律法、「あなたは、わたし以外に、ほかの神々はあつてはならない」、これを忠実に守ろうとして、告発されてしまいます。

王は三人にこう語ります。15節。「今、もしおまへたちが、角笛、二管の笛、豎琴、三角琴、ハーブ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞いたとき、ひれ伏して、私が造つた像を拝むなら、それでよい。しかし、もし拝まないなら、おまへたちは、即刻、火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からおまへたちを救い出せるだろうか。」

どのような神もお前たちを救い出すことができない。王は確信に満ちながら語っています。さて、このことばどのような決着を迎えるのか。そのことを次に見ます。

2 三人の証言

1) 主が救い出すことができる

王の脅迫に対して三人はこのように答えます。16節後半から17節。「ネブカドネツアル王よ、このことについて、私たちはお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ、あなたの手からでも救い出します。」

自分たちが仕える神、主である方は燃える火の中から私たちを救い出すことができる。まっすぐ

に答えています。皆さんはこれを読んでどう思うでしょうか。自分の経験と照らし合わせて見ると、「そうのとおり」と簡単には言えないのではないかと。例えば、自分や家族が大変な病気にかかって死にかけるときがあります。あるいは失業してしまい、頑張っても職を探しても見つからないという方もいます。そのようなとき、誰でも祈ります。「あなたは私たちを救い出すことのできるお方です。どうか私を救ってください。」その結果、幸いなことに祈りがかなえられ道が開かれていくことがあります。

2) たとえそうでなくても

しかしそうでないときもたくさんあります。そのようなとき私たちはどんな反応をするか。大きく二つあるでしょう。一つ目は神を疑うという反応。聖書に書いてあることは結局嘘だったのではないかと。そして二つ目の反応はその逆で、神を責める代わりに自分を責めていく。「私に何か悪いことがあるので、神は私の祈りを聞いてくれない。私のせいだ。」そんなふうに分のせいにしていく。

今挙げた二つの反応をしたくなる気持ちは分かります。でもこの三人はまったく別の反応をしました。彼らはこう言った。17節。「しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」

神は必ず救ってくださると信じている。そして救ってくださると祈る。でもいっぽうで、期待したような奇蹟はなにも起きないかも知れない。このまま炉に投げ込まれることになるかも知れない、とも語る。それでも王が建てた金の像は拝まない。そう言っています。

3) 死を覚悟しながら祈って待ち望む

結果はどうなったのでしょうか。三人は燃える火の中に投げ込まれてしまいます。ところがそのとき奇蹟が起きて、三人は燃えさかる火の中から救い出されます。こんな話を読んで素直に喜べるのでしょうか。彼らは特別な信仰者だからこうなったのだ。自分とは違う。そう思いたくなります。

でもどうでしょうか。彼らが王の前に連れて来られたとき、どんな思いであったのかを想像してみてください。「私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。」そう答えました。しかしそれがいつであるのかについては、神が決めることであって自分で決めることではない。それで「たとえそうでなくても」となりま

す。彼らは、自分は助かる、と思っていたのではないのです。むしろ殺されることを覚悟しながら王の前で証言しています。でも、自分たちは必ず救われていく。そこはまったくぶれません。もう死ぬしかないのだという切羽詰まっているときに、どうしてこのような確信があったのか。信仰がすばらしかったから、やはりそういうことなのでしょう。もしそうであれば信仰は努力になります。努力ではありません。答えはちゃんと聖書に書いてあります。

3 神の励まし

1) 永遠に続く国

ダニエルが幻の中で王の見た夢の意味を教えてもらった時、神を賛美したことを思いだしてください。もちろんそれは、これで大勢の人たちが助かることになったから、それで賛美した。でもそれだけではない。夢を通して神が大切な真理を教えてくれたからです。いったい何か。2章44節。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。」

絶大な権力を持つネブカドネツアル王もやがて死にます。バビロンはやがて滅びます。金の像もいつかは朽ちて跡形もなくなります。しかし私たちは、神が与えてくださる永遠に続く神の国に招かれる。不思議なことですが、神は異教の神々を拝むネブカドネツアル王にそのような夢を見させ、その夢をダニエルが解き明かすという手の込んだ方法をとって、神の永遠の救いのことを教えられていた。それがあったから、いま火の中に投げ込まれるという瀬戸際にあっても、必ず主は救ってくださると証しできた。神がこの三人を励ましているのです。

2) イエス・キリストが歩まれた道

でもどうでしょうか。今解決しなければ、手遅れになる、取り返しのつかないことになる。いつ来るか分からない未来の話しをされても困る。そう言いたくならないでしょうか。

そんなときイエス・キリストがどのような所を歩まれたのかを思い起こしてみたらどうでしょうか。神のひとり子である方は、父なる神に忠実に従っていった結果、理不尽な罪を着せられて十字架におつきになります。そのとき人々は叫びました。「もしお前が神の子なら自分を救ってみろ。」しかし何も起きません。十字架で主は叫ばれまし

た。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」

神が救いの力を発揮すべきもつともふさわしい時であったはずなのに、十字架で何も奇蹟が起きません。そうしてこの方は死んで行かれました。それはどういうことなのでしょう。たとえそうでなくても、たとえ今奇蹟が起きないで救いが見えなくても、それでも父なる神に従い続ける。父は必ず子を死から救い出し、よみがえらせてくださる。そのような信仰を示してくださっていました。

私たちは主が歩んだ道をたどっていきます。私たちは祈りは必ず聞かれると信じて神に祈ることができます。そしてこうも祈ることになる。「たとえそうでなくても。」

これは、あきらめということではありません。私たちは神の国にこそ本当の平安があるのだ。地上で試練の嵐の中にあって苦しんでも、やがて迎えられる国があるのだ。そこに目を留めながら歩んでいることを改めて覚えるのです。